

重点目標  
2

発達段階に応じたキャリア教育を充実します。

～ 子どもの発達段階に応じて勤労観・職業観を育むキャリア教育の一層の充実に取り組んでいきます。～

1 平成23年度の主な施策の取組・成果、自己評価

「アクションプランⅡ」第1章の「重点目標2」に掲げた「主な施策」（8項目）について、平成23年度は、以下の事業を中心に取組を進めた。

① 「キャリア教育ノート」の作成・活用 …… 1事業

区分	内容
主な事業の取組	○ 「キャリア教育ノート」の作成 [詳細 102 頁] 「夢を見つけ夢をかなえる航海ノート」を作成し、公立小・中・高等学校、特別支援学校全校に配付、県教育委員会のWebページにも掲載した。
主な成果	◎ キャリア教育ノートは「学校の実態に即した内容になっている。」「小中高12年間の系統性が示されている」など学校現場から高い評価を受けた。
自己評価	
☞ 目標に適う成果があったか。	✿ 12年間を通して、児童生徒が節目ごとに振りかえり、自分自身の成長を知り、自己理解を深めることができる構成となっており、目標に適う成果があったと考えられる。
☞ 今後の課題・方向性はどうか。	✿ 小学校(小学部)から高等学校(高等部)段階まで継続的に使用されるよう各学校での活用を促進するとともに、各学校からの意見を集約し、ノートの改善を図っていく。

② 産業界からの協力・参画の促進 …… 1事業

区分	内容
主な事業の取組	○ 「あいち夢はぐくみサポーター」の活用 [詳細 103 頁] 平成23年7月に設置した「あいち夢はぐくみサポーター制度」により、児童生徒の教育活動を支援する県内の事業所や団体を認証・登録するとともに、事業所等の社会貢献活動を広報した。 ☆ 実績：登録数 23 件
主な成果	◎ 制度開始が年度途中であり、まだ、登録数が少ないが、中学生の職場体験の受入事業所が、新たに高等学校のインターンシップについて受入れを表明するなどの波及効果があった。

自 己 評 価	
<p>☞ 目標に合う成果があったか。</p> <p>☞ 今後の課題・方向性はどうか。</p>	<p>✿ 中学校と事業所の連携が高校に拡大するなどの波及効果が出ており、目標に合う成果があった。</p> <p>✿ 就職支援事務嘱託員やインターンシップ実施校が各事業所に対して積極的にサポーターの登録を依頼するなど、登録数の拡大を図っていく。</p>

### ③ 小学校におけるキャリア教育の推進 …… 1事業

区 分	内 容
主な事業の取組	<p>○ 「夢をはぐくむ あいち・モノづくり体験」事業 [詳細104頁]</p> <p>筆作りや陶器作りなど各地の伝統産業を中心に、熟練技能士等の指導の下、小学生がモノづくりを直接体験し、仕事に対する心構えなどの話を聞くことにより、働くことや学ぶことへの基盤づくりを行った。</p> <p>☆ 実績：県内53市町村（名古屋市を除く）で各1校実施</p>
主 な 成 果	<p>◎ 子どもたちが、講師の話から「一つの夢にたどりつくには、たくさんの努力が必要だ」と思ったり、モノづくりの体験により「興味がわいた」など、モノづくりの楽しさやおもしろさを感じるとともに、伝統産業への理解を深めることができた。</p>

自 己 評 価	
<p>☞ 目標に合う成果があったか。</p> <p>☞ 今後の課題・方向性はどうか。</p>	<p>✿ 子どもたちの「モノづくり」や地域の伝統産業への関心を高める効果が出ており、目標に合う成果があったと考えられる。</p> <p>✿ 体験を一過性のものとせず、児童の社会的・職業的自立に必要な能力や態度の育成につなげていく。また、講師の選定に苦慮している市町村もあることから、「あいち夢はぐくみサポーター」の活用や、地域・事業所等との情報交換の場を確保しながら、地域や産業界との連携・協働を一層図り、取組を継続していく。</p>

### ④ 中学校における職場体験活動の充実 …… 1事業

区 分	内 容
主な事業の取組	<p>○ 「あいち・出会いと体験の道場」推進事業 [詳細105頁]</p> <p>学校と地域が連携して、中学生の5日間程度の職場体験を実施した。</p> <p>☆ 実績：全公立中学校304校、約50,000人参加（名古屋市除く）</p>
主 な 成 果	<p>◎ 体験した中学生の多くが「働くことの大変さやルールなどがわかり、よい体験になった。将来について考えるよい機会になった。」「分からないことは、誰にでも聞けるようになった。」など、勤労観・職業観の育成や人間関係の深まりなどに効果が見られた。</p>

自 己 評 価	
<p>☞ 目標に合う成果があったか。</p> <p>☞ 今後の課題・方向性はどうか。</p>	<p>☼ 子どもたちの勤労観・職業観の育成や人間関係の深まりなどに効果が出ており、目標に合う成果があったと考えられる。</p> <p>☼ 今後も、地域や産業界との連携・協働を一層図り、取組を継続していく。</p>

**⑤ 高等学校におけるインターンシップ等の実施** ・ ・ ・ 1事業

区 分	内 容
主な事業の取組	<p>○ <b>県立高校におけるインターンシップ等の推進</b> [詳細 106 頁]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普通科を含む全日制県立高等学校全校において、民間企業などでのインターンシップを行った。</li> <li>☆ 実績：全日制県立高等学校全校 146 校、9,483 人参加</li> <li>・ キャリア教育地域推進会議を開催し、各校における取組の検証、研究指定校による実践事例発表、報告書の作成を行った。</li> <li>☆ 実績：年2回開催</li> <li>・ キャリア教育推進フォーラムを開催し、講演、義務教育段階でのキャリア教育の事例報告などを行った。</li> <li>☆ 実績：年1回開催</li> </ul>
主 な 成 果	<p>◎ インターンシップ等を通じて、多くの生徒から、「コミュニケーションの大切さを痛感した」、「将来の目標が明確になった」などの声が聞かれ、働くことの喜びや厳しさを実感し、社会人として必要な協調性、マナー、コミュニケーション能力などを習得することができた。</p>

自 己 評 価	
<p>☞ 目標に合う成果があったか。</p> <p>☞ 今後の課題・方向性はどうか。</p>	<p>☼ インターンシップに参加した生徒が、社会人として必要な協調性や、マナー、コミュニケーション能力を習得するなどの効果が出ており、目標に合う成果があった。</p> <p>☼ 普通科におけるインターンシップ等の取組が遅れているため、積極的に取り組んで行く必要がある。また、昨今の厳しい経済状況などの影響により、インターンシップの実施期間の拡大が進んでいないため、地域や産業界の協力を得ながら、取組を充実していく必要がある。</p> <p><b>【県実施調査から見た課題】</b>                  インターンシップ等の経験が、自分の進路選択について考えるきっかけとなったり、マナーや言葉づかいの大切さの理解につながっていたりすることから、より一層の拡大に取り組んで行く。</p>

**⑥ 特別支援学校における発達段階に応じたキャリア教育の推進** ・ ・ ・ 1事業

区 分	内 容
主な事業の取組	<p>○ <b>特別支援学校におけるキャリア教育の推進</b> [詳細 108 頁]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ チャレンジ体験推進事業（ふれジョブ）                      中学部の生徒が、就労の準備体験として、商店、工場、コンビニエンスストアなどで、職場見学や簡単な作業などの体験を行った。</li> <li>☆ 実績：特別支援学校 21 校の中学部生徒 200 人が参加</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 長期間現場実習                      高等部の生徒が事業所等で長期間の就労体験を行った。                      ☆ 実績：特別支援学校 24 校の高等部生徒 228 人が参加</li> <li>・ 県立学校就業体験                      高等部の生徒が県立高校・特別支援学校で就業体験を行った。                      ☆ 実績：特別支援学校 19 校の高等部生徒 246 人が参加</li> </ul>
主 な 成 果	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 体験した生徒からは、「自分の将来を自分で考えるよい機会になった。」「作業を経験することで自分の課題を把握できた。」などの感想があり、将来について考えるよい機会になった。</li> <li>◎ 現場実習事業を通じて、長期間の現場実習が可能な企業を新たに開拓することができ、今後の産業現場等における実習先の確保や3年生の就職活動に向けて、有益な取組となった。</li> </ul>
<b>自 己 評 価</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>☞ 目標に合う成果があったか。</li> <li>☞ 今後の課題・方向性はどうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✿ 体験した生徒は、見学や体験を通して、仕事の大変さややりがいを実感するとともに、自分の課題も把握することができ、生徒の就労観・勤労観を高める効果が出ており、目標に合う成果があったと考えられる。</li> <li>✿ 今後は、小学部での取組にも拡大しながら、引き続き、発達段階に応じた職場体験を地域の中で進めていく。</li> </ul>

**⑦ 産業教育の充実と技術・技能を尊重する機運の醸成** . . . 4 事業

区 分	内 容
主な事業の取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ <b>総合技術高等学校の設置</b> [詳細 111 頁]                      本県の工業教育の中核となる高等学校の設置に向け準備を進めた。                      ☆ 実績：校舎・実習棟などの実施設計</li> <li>○ <b>地域ものづくりスキルアップ事業</b> [詳細 112 頁]                      工業高校の教育課程に、地域の企業との連携プログラムを組み込み、産業界のニーズを踏まえた実践的な技能修得を行った。                      ☆ 実績：61 社で工業高校 17 校 199 人の生徒が参加</li> <li>○ <b>あいちゃんフェスタ 2011 の開催</b> [詳細 113 頁]                      「あいちゃんフェスタ 2011」を開催し、専門学科や総合学科高校で産業教育を学ぶ生徒の作品展示、生徒の「匠の技」披露、研究発表会などを行った。                      ☆ 実績：県内 2 会場、専門高校 65 校、総合学科高校 8 校参加</li> <li>○ <b>「職人の技」PR事業</b> [詳細 114 頁]                      左官、造園、タイル張り、鳶(とび)、理容の 5 職種を中心とした仕事内容や魅力、職人の技などについて、キャラバン隊「あいち技能応援団」による県民へのPR活動を行った。                      ☆ 実績：平成 23 年 11 月～24 年 3 月、県内主要駅・各種メディア・大型ショッピングセンター等におけるPR活動、「職人の技」体験教室の開催等</li> </ul>

主 な 成 果	<p>◎ 将来のスペシャリストや生産現場の牽引役となる人材の育成を目指すといった総合技術高校の構想を設計に反映させることができた。</p> <p>◎ 「地域づくりスキルアップ事業」に参加した生徒の中には、実践的な技能習得により、資格を取得したり、研修企業の良さを知り、その企業に就職する生徒が見られるなどの成果があった。また、引率教員も地元企業の優れた技術・技能に触れる機会となり、学校と企業との連携が強化された。</p> <p>◎ 「あいちさんフェスタ 2011」では、高校生の活躍の姿を幅広く紹介することで、将来の産業を担う「スペシャリスト」の育成と産業教育の一層の振興が図られるとともに、県民に対し産業教育の内容を周知することができた。</p> <p>◎ 「職人の技」PR事業では、若年労働者の減少や後継者不足が課題となっている職種について、職人の仕事内容や魅力、職人の技などについて広くPRすることで、技能者を目指す人材の裾野を広げることができた。</p>
---------	--

**自 己 評 価**

<p>☞ 目標に適う成果があったか。</p> <p>☞ 今後の課題・方向性はどうか。</p>	<p>✿ 総合技術高校については、将来に向け新たな工業教育の拠点づくりが着実に進められた。</p> <p>地域ものづくりスキルアップ事業に参加した生徒が研修先の企業に就職するなどの効果を始め、将来の産業を担う人材の育成に繋がる効果が図られるなど、目標に適う成果があったと考えられる。</p> <p>✿ 総合技術高校については、本県工業教育の拠点となるよう平成27年度の開校に向け教育課程、設備等について検討していく。</p> <p>スキルアップ事業については、経済状況の悪化により、受入れ企業の開拓が難しくなっており、より多くの地元企業に生徒を受け入れてもらうために、学校、産業界、行政3者の連携を強化していく必要がある。</p> <p>「あいちさんフェスタ」については、平成24年度の「あいちさんフェスタ 2012」を平成25年度に開催する「全国産業教育フェア愛知大会」のプレ大会に位置付け、大会の充実を図っていく。</p> <p>平成26年の「技能五輪全国大会・全国障害者技能競技大会(全国アビリンピック)」の本県での開催を広く県民に周知するために、「職人の技」のPR活動を今後も積極的に推進していく。</p>
--	---

**⑧ 世界を舞台に活躍できる人づくり . . . 3事業**

区 分	内 容
主な事業の取組	<p>○ <b>英語の授業改善</b> [詳細 115 頁]</p> <p>外国語指導助手 (ALT) を配置するとともに、英語科教員の研修を実施し、資質向上を図った。</p> <p>☆ 実績：外国語指導助手等 40 人・在県外国人語学講師 15 人配置(小・中学校)、英語科教員地区別研修会 750 人受講(県立学校)</p> <p>○ <b>国際理解コースや国際コミュニケーションコース等での取組</b> [詳細 116 頁]</p> <p>専門学科、コース設置の県立高校を中心に、海外の学校との交流活動、海外語学研修などの取組を行った。</p> <p>☆ 実績：国際教養科 1 校、英語科 2 校、国際理解コース 4 校、国際コミュニケーションコース 2 校</p>

	<p>○ <b>近隣アジア諸国言語教育の推進</b> [詳細 116 頁]                  アジア諸国との交流の拡大を踏まえ、専門学科、総合学科、普通科の国際理解コース設置校、昼間定時制の県立高校を中心に、中国語（12校）、韓国・朝鮮語（5校）を選択し学習できる機会を設けた。</p>
<p>主 な 成 果</p>	<p>◎ 小・中学生がネイティブスピーカーから直接英語を聞くことによって、日本と外国との文化や生活習慣の違いに気付くなど、体験的に学ぶ機会となった。</p> <p>◎ 高校生の国際的な視野を広げることができた。</p> <p>◎ アジア諸国の言語・文化に対する興味・関心が高まり、「21世紀東アジア青少年大交流計画」（外務省主催）等におけるアジアからの高校生の円滑な受入れにつながった。</p>
<p>自 己 評 価</p>	
<p>☞ 目標に合う成果があったか。</p> <p>☞ 今後の課題・方向性はどうか。</p>	<p>✿ 事業を通して、児童生徒が日本と外国との文化や生活習慣の違いに気づいたり、生徒の国際的な視野を広げることができたなどの効果が出ており、世界で活躍できる人材の育成を通じて、目標に合う成果があったと考えられる。</p> <p>✿ 小・中学校については、市町村教育委員会に対して、英語教育に関する教員の研修を実施し、質の向上を図るとともに、ALTを活用した効果的な指導方法の改善を行っていく。</p> <p>また、県立学校においては、今後も必要に応じてコースの設置を図るなど、国際交流活動等を視野に入れた国際理解教育を一層充実させていく。</p> <p>さらに、アジア諸国の言語・文化を学ぶことのできる環境を維持・拡大させていく。</p>

## 2 自己評価の総括による改善の方向

### 1 「主な施策」の総括的な評価 ～ 取組の視点も踏まえて ～

- ★ 「キャリア教育ノート」は、小学校(小学部)から高等学校(高等部)までの接続を意識して作成されており、また、県が作成・配布することにより各学校の取組を支援することができた。
- ★ 職場体験活動やインターンシップなどを伴うキャリア教育は、市町村や、民間企業など地域との連携・協力なくしては行うことのできない取組であり、優れた技能を持つ地域の人材の力を学校教育に生かしたり、事業所の社会貢献活動と児童生徒の教育活動を結びつけることができた。
- ★ どの施策においても、概ね、3つの取組の視点を踏まえながら、「発達段階に応じたキャリア教育の充実」といった目標達成に向けた成果があったと思われる。

### 2 「主な施策」以外の取組の状況

- ★ キャリア教育関係事業説明会や市町村の学校教育担当指導主事会を開催し、『「あいち・出会いと体験の道場」推進事業』、「夢をはぐくむ あいち・モノづくり体験事業」について、市町村教育委員会の担当者に事業内容を説明し、より効果的な事業となるよう周知を図った。  
また、「キャリア教育ノート」の作成の目的や効果的な使用方法を説明するとともに、積極的な活用を依頼した。
- ★ 学校訪問や教員研修会の際などに、管理職、分掌主任に対して、小学校(小学部)から高等学校(高等部)まで発達段階に応じた組織的・系統的なキャリア教育の推進について指導した。
- ★ 教育委員が、中学生の職場体験の実情を把握するため、市立中学校を訪問し、学校関係者と意見を交換するとともに、生徒が職場体験をしている事業所を訪れ、生徒や事業者から直接、感想や意見を聴取した。  
また、県立学校長との懇談会や全国都道府県教育委員会連合会の総会において、「キャリア教育」について意見交換を行い、本県の県立学校や他県におけるキャリア教育の現状と課題についての理解を深めた。  
さらに、県立高校を訪問し、授業の見学や教職員との意見交換を通じて、高等学校における英語の授業改善に向けた取組について調査した。

### 3 平成24年度意識・実態調査から見た課題

- ★ 「将来の夢や自信を持っていますか」という質問に対して、「当てはまる」と答えた児童生徒の割合が、小学生、中学生、高校生と進むに従って低くなった。
- ★ 「学校の学習が将来の夢や希望をかなえるために役立つと思いますか」という質問に対して、「そう思う」と答えた児童生徒の割合が、小学生よりも中学生の方が低かった。
- ★ 「目標を実現するために計画を立てて行動している」と答えた高校生の割合は42.7%だった。
- ★ インターンシップ等の体験について、「自らの進路選択について考えるきっかけとなった」と答えた高校生の割合は62.3%で、「マナーや言葉づかいの大切さを理解することができた」と答えた高校生の割合は85.1%だった。

◎ 評価のまとめ ～ 今後の改善の方向 ～

- ★ 「発達段階に応じたキャリア教育の充実」については、小学校(小学部)から高等学校(高等部)までの接続を意識した取組や、民間企業など地域と連携・協力した取組、日々の学校における教育活動、県教育委員会による市町村教育委員会・学校への支援・指導などを通して、キャリア教育を推進するための基盤づくりと、その充実を図るための取組が推進されている。
- ★ しかしながら、児童生徒の意識実態調査を見ると、将来の夢や自信に関する質問において、小学生、中学生、高校生と進むに従って、肯定的に答えた児童生徒の割合が低くなっている。一方、高校生においては、インターンシップ等の経験が、自分の進路選択について考えるきっかけとなったり、マナーや言葉づかいの大切さの理解につながっていたりすることから、こうした実態を踏まえて施策の充実を図っていく必要がある。
- ★ また、有識者の意見にもあるように、児童生徒の興味や関心と合致した体験活動により学ぶ意欲の喚起へと繋げていくとともに、学校の学習が将来にどう生かされるかという将来の活動への道筋をしっかりと示し、学校教育全体に「社会人・職業人」に向けての成長・自立をめざす明確な方向性や枠付けを工夫することが必要である。
- ★ 子どもたちの勤労観・職業観の育成は、いまだ大きな課題であることから、今後とも、産業界との連携を強化しながら、発達段階に応じた系統的な取組を充実していく必要がある。  
なお、県立高校普通科におけるインターンシップ事業については、専門学科高校に比べ遅れているなどの課題が示されていることから、県と関係機関・企業・団体とのネットワークを生かした支援を今後とも充実していく必要がある。



### 3 有識者の意見

有識者の意見は、点検・評価報告書原案に対するものであり、本冊子は、この意見を踏まえて作成している。

#### 神奈川大学 特別招聘教授 安彦忠彦

「キャリア教育ノート」の作成・配布・活用はユニークで、学校現場から歓迎されていることは評価できるが、むしろ本来の価値は、学校側の指導によって、子ども自身や保護者などから満足されているかどうか、の声によって決まるので、その種のデータを取る必要がある。

「主な施策」がどれもある意味で見えやすいので、もう少し数字による評価があってもよい。その意味では、アウトカムに当たる部分のデータの取り方が少ない。新規のものについては結果・効果の比較考量はできないが、目標値を掲げて施策を展開し、その数値への到達状況で見ることができるものもある。

キャリア教育は必ずしも特定のプログラムや行事などで進められるものではないので、学校教育の全体に「社会人・職業人」へ向けての成長・自立をめざす、明確な方向性や枠付けが工夫されているかどうかの問題である。ノートはその一つの道具にすぎないことを忘れないようにしてほしい。

#### 愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦

キャリア教育は、学校・地域・家庭が総合的にタイアップしないとできない。インターンシップ等の推進について、53の小学校が事業に参加しているが、地域の特産、ものづくりに子どもの時に経験することは意味ある。その意味でも、地元の産業（農業、水産、工業、商業等）に密着したインターンシップなら、もっと多くの地域や学校でできる。

高校と大学の連携強化が叫ばれているが、高校や大学で学ぶことが将来にどう生かされるか、という将来への活動への道筋をしっかりと示しながら連携をする必要がある。将来の夢をもって高校教育を受けられる環境づくりが大切である。

世界を舞台に活躍できる人づくりで、外国語教育・国際理解教育が行われている。ただ、外国で実際にコミュニケーションが取れることが目標の英語教育としている中で、小学校での英語と中学校以降での英語教育とのギャップは依然としてある。高校では、授業を英語で行うように指導要領が改訂された。しかしそれぞれの校種に合った英語教育のできる教員の数は少ない。教員の研修が急がれる。外国語指導助手の増員とともに、大学などの高等教育機関を活用し、研修の充実を図る。センター等の研修の充実が必要となる。

中部大学現代教育学部児童教育学科教授 今川峰子

キャリア教育ノートを活用して自分自身の成長の軌跡を確認し、自己理解を深めるとともに将来の社会人・職業人としての生きる基盤づくりのためのキャリア教育が本格的に推進され始めたを受け取っている。

すでに小学校では自然体験、奉仕活動など、中学校では「あいち・出会いと体験の道場」推進事業が実施され、毎年協力してもらう企業・商店・福祉関連事業所なども決まっている。この5日間の職場体験によって、子どもたちの勤労観・職業観の育成や人間関係の深まりに効果が出ているとの教育委員会事務局の自己評価がされている。ただ、5日間の体験によって職業に対する関心や社会人となることへの自覚を深めるまでにはまだ至っていないと思われる。おそらく職業に対する関心が深まれば、学校での授業への学習意欲も高まり、相乗効果が期待されるはずである。生徒を送り出す学校側の優れた取組が有意義な職場体験に結びつくものと思われる。すでにこの事業は積み重ねられてきているために、これまでの実績を点検・評価することが必要である。又、生徒の興味や関心と合致した職場体験であれば、学ぶ意欲も喚起されて、有意義な職場体験になっていたと思うが、そうでない場合もある。1) 生徒の職場体験の希望とのマッチングについて、2) 送り出す学校側の事前の学習・事後の学習、3) 教科との関連など、すでに蓄積されたデータに基づいて、評価・点検をした上で、今後のキャリア教育に活かすことを期待したい。

学校の学習が将来の夢や希望をかなえるために役立つと思うかとの調査からは、残念ながら小学生よりも中学生の方が役立つと答えた割合が低くなっている。しかも、高校生になるに従って、学校で好きな授業があると答えた割合は低い。高校での授業科目と関連させ、インターンシップにより職場体験から学んだことから、将来の職業観や生き方を深める対策を立ててほしい。普通科高校の取組が遅れていることは憂慮される。大学にただ入学して、専門に進んでも進路が見つからない学生が現実には多数いる。長期間教育を受けてきた意味がない。